

# 古事記あれこれ

～ビジュアルで見る古事記～(2012 年 12 月 1 日～)

～古文書で見る古事記～(2013 年 1 月 13 日～)

場所

鶴舞中央図書館 2 階

期間

2012 年 12 月 1 日 (土)  
～2013 年 3 月 14 日 (木)

『古事記』は、天武天皇が稗田阿礼ひえだのあれに命じて誦習させた「帝王日継（帝紀）」（帝紀・各天皇の即位から崩御に至る皇室の記録）と「先代旧辞（本辞）」（神話・伝承・歌謡を内容としたもの）を、和銅 4 年（711）に元明天皇が太安万侶おおのやすまろに撰録することを命じ、和銅 5 年（712）に完成しました。古事記という書名は、古の事（辞）を記した書物という意味で名づけられたものですが、撰録の由来を記した序文には明記されていないので、当初からの命名か後人の命名かは明らかではありません。古くは「フルコトブミ」と訓む説もありましたが、現在では一般に「コジキ」と音で読み慣わされています。文章は漢字で書かれていますが、安万侶は序文の中で「上古の日本語の文章詞句を漢字で表記することは甚だむずかしい。・・・一句の中に音と訓とを交用し、或いは一事をすべて訓のみで表記すると共に、慣用化した表記はこれに従うという方法をとった。」と述べ、いわゆる万葉仮名が交えられています。

その内容は、上巻は、撰録者の太安万侶の序文と天地開闢から神々の物語の神代、中巻は神倭伊波かみやまといは禮毘古命れびこのみこと（神武天皇）から品陀和氣命ほむだわけのみこと（応神天皇）、下巻は大雀命おほさざきのみこと（仁徳天皇）から豊御食炊屋比売命とよみけかしみやひぎのみこと（推古天皇）の時代の出来事や伝説を叙述した歴史書です。

数々の神話を収めています。例えば「やまたのおろち」（須佐之男命すさのおのみこと）「いなばのしろさぎ」（大国主神おほなむち＝大穴牟遲神ほか別称多）「海幸彦山幸彦」（火遠理命ほおりのみことと火照命ほでりのみこと）の名前で御存じの方も多いのではないのでしょうか。

『古事記』と同じく『日本書紀』は、天武天皇の命で編纂が始まり、舎人親王とねりしんのうを中心にまとめられ養老 4 年（720）に完成しました。神代から持統天皇までの出来事を漢文・編年体で記すわが国で最初に編纂された国史で、中国の史書をモデルにしたと推測されています。『古事記』とは共通する素材や内容を持ちながらその描き方の違いも大きく、伝わり方も違ってきます。『日本書紀』は、完成当初から歴史書として重視されていました。平安時代には天皇の御前で講義する講筵が催され、平安時代からの写本も現存しています。一方『古事記』は、奈良・平安の時代には影が薄く、鎌倉後期 1270 年代蒙古襲来以後、神道書として光が当たり始めました。しかし、この時古事記は入手困難な書物になっており、とりわけ中巻の写本は諸家にもなく、ただ（撰録家伝領の）鴨院文庫にのみ存在する状況でした。

◆『古文書で見る古事記』の展示では、当館特別集書の中から古事記関連のものをご紹介します。

## 『古事記』の写本

展示は国宝真福寺本『古事記』の複製本（京都印書館 1945）

『古事記』は写本でしか残っていません。その諸本は、伊勢系（真福寺本系）とト部系の2群に分かれます。その写本の中で現存最古の3巻が揃っている国宝『古事記』が、名古屋にあることを御存知でしょうか。

現存最古（1371年～1372年）写本の『古事記』は、通称「大須観音」正式名称「北野山真福寺宝生院」に伝わるもので、真福寺本『古事記』と称されています。（大須観音は、鎌倉時代末期に尾張国中島郡大須に建てられたことに始まり、慶長17年（1612）に徳川家康の命により現在地へ移転しました。）

真福寺本『古事記』は、二代住持信瑜じゅうじしんゆの命で賢瑜けんゆが書写したものです。初代住持の能信のうしん・二代目信瑜しんゆは、仏教や学問を学ぶ拠点として多くの書物を弟子に書写させ「大須文庫」（真福寺文庫）の基礎を築きました。二代目信瑜は東大寺東南院しょうちんぼっしんのうの聖珍法親王に仕え伝授を受け、その信瑜を通して東南院から数多くのすぐれた書物がもたらされました。また、東大寺東南院たかつかさと鷹司関白家が代々密接な関わりを持っていたことから、神道に関わる貴重な本の多くは、『古事記』を含めて、鷹司関白家から東大寺東南院を経て、もたらされました。こうして中巻は、上下巻を写した時に真福寺本の祖本に加えられていたことから、今日3巻揃った形で見ることができるのです。

『古事記』の書写した年を判明させたのは、尾張いなばみちくに藩士稲葉通邦（1744-1801）でした。

稲葉通邦は、寛政9年（1797）9代藩主徳川宗睦むねちかに「大須宝生院蔵本古事記校合」を命じられ、各巻末でつちようそうの粘葉装の糊綴じ部分にメモ書きがあることを発見し、そこには賢瑜の署名と年齢が書かれており、上・中巻を賢瑜28歳の年に下巻を翌年に書写したとわかりました。

### 「大須文庫」（真福寺文庫）

国宝4件、重要文化財37件のほか、1万5千点を超える書籍を所蔵しています。家康は、文庫の重要性に早くから気が付いていました。移転後は、寺や文庫は尾張藩の保護下に置かれるようになったと考えられます。寛政～享和年間には文献が模刻刊行され（大館高門『口遊』、植松有信『将門おおだてたかかど記』、稲葉通邦『和妙類聚抄くちずさみ』など）、蔵書うえまつありのぶの重要性が世間に知られるようになりました。文政2年（1819）国学者・塙保己一しょうもんが来訪し、文庫の蔵書を数多く書写し、正・続『群書類従』の底本ぐんしよるいじゆうに採られました。文政年間には、尾張藩寺社奉行所により点検が行われ、目録作成や貴重書の補修がされました。明治以降は、国文学や歴史学の研究資料として重視、利用され、近年しんぶくじぜんほんそうかん『真福寺善本叢刊』も刊行されました。現在、古典籍の宝庫である大須文庫の全容を明らかにするため、名古屋大学文学科と名古屋市博物館を中心に調査・整理作業が行われています。

通邦は、大須宝生院蔵1万5000点以上の蔵書全てを検査して、奥書に書写年と賢瑜の年齢が書かれている写本『秘蔵法鑑』(ひそくほうかん) (応安3年・賢瑜27歳と奥書にあり)を見つけ出し、これにより『古事記』の書写年を上・中巻が応安4年(1371)、下巻が応安5年(1372)と確定させました。

この発見を通邦は、自分で書写した『古事記』の奥書と『類聚神祇本源』(るいじゆじんぎほんげん)に付属する上申書にだけ記したため、一般に知れ渡ることなく、真福寺本『古事記』の書写者とその年代は、85年後の明治16年になって発見されることになり、通邦の業績は忘れられてしまいました。

現存最古の真福寺本『古事記』は、明治38年(1905)に旧国宝に指定され、昭和26年(1951)新国宝に指定されました。昭和17年(1942)から東京国立博物館で保管されていましたが、名古屋市博物館が昭和52年(1977)に開館して名古屋に取り戻す運動が出始め、平成5年(1993)にようやく名古屋市博物館への寄託館変更が文化庁から承認され、帰還が決まりました。名古屋市博物館として初めての国宝保管となりました。

## 『古事記』の刊本

『古事記 寛永版本』 3冊 寛永21年(1644)刊 《河村文庫》

寛永21年(1644)刊の『古事記』の初めての版本(版木に彫って印刷した本)に、河村秀穎(ひでかい)が他の写本・刊本等と対照して異同などの注を書き入れた本です。

『(鼈頭)古事記』 3冊 版本 度会延佳(わたらいのぶよし)校訂 貞享4年(1687)跋文 《河村文庫》

刊行(印刷)された最初の古事記注釈本で、書名の由来は、校異・略注を鼈頭(頭注)としたことによります。作者の度会延佳(わたらいのぶよし)(1615~90)は、別姓出口、豊受大神宮(外宮)の権禰宜(ごんねぎ)・神道学者で、伊勢神道を再興しました。跋文に「近世刊行之古事記文字謬多」とあり、先に刊行された寛永版本の誤りを正すべく、真福寺本をはじめとする伊勢系諸本やト部系諸本を含む数種の諸本によって校訂が行われました。

## 『古事記』研究書

『古事記伝』 44冊 本居宣長著 《植松本(1~29刊本・30~44写本)》 《三輪本》

『古事記伝』は、本居宣長が、35歳頃から35年をかけて69歳の時に書き終えた『古事記』の研究・注釈書です。本文の校訂・訓読・語釈からなり、その後の研究に多大な影響を与え続け、現在でもその価値を失っていません。

宣長の古事記研究は、宝暦13年(1763)賀茂真淵に直面したあたりから本格化し、寛政10年(1798)に『古事記伝』の浄書が終わりました。その刊行は、寛政2年(1790)に第1巻から第5巻を刊行し、寛政9年(1797)刊行の第17巻までが宣長生存中でした。没後21年後の文政5年(1822)に全44冊の刊行が完了しました。名古屋の書肆、永楽屋東四郎から刊行され、十七附録の『三大考』(えいらくやとうしろう) (門人服部中庸著) 1冊、『古事記伝注釈目録』3冊が加わり、全48冊で販売されました。

第1巻は、『古事記』と言う本の価値を明らかにし、『日本書紀』等の本との比較、書名、諸本、研究史、また解説の基礎となる文体論、文字や訓法についてまず書き、宣長の古道（古代世界を貫く理念のようなもの）についての考え方を述べた「直毘靈」<sup>ナホビノミタマ</sup>などを載せ、第2巻は序文の解釈と系図、第3巻から第44巻が本文とその訓読、注釈です。

宣長は『古事記』研究の方法と意義を説き、全部漢字で書かれた本文に読みを付けて、更に背後にある当時の人の思想や世界観まで読みとろうとしました。

『古事記伝』第1巻に真福寺本『古事記』について書かれています。

「其後又、尾張国名児屋なる真福寺といふ寺【俗(ヨ)に大洲の観音といふ、】に、昔より伝へ蔵(ア)る本を写せるを見るに、こは余(ホカ)の本どもとは異(コト)なる、めづらしき事をりをりあるを、字の脱(オチ)たる誤れるなどは、殊にしげくぞある、かゝればなほ今ノ世には、誤なき古(ヘノ)本は、在(アリ)がたきなりけり、されど右の本どもも、これかれ得失(ヨキアシキ)ことは互(タガヒ)に有(リ)て、見合ハすれば、益(タスケ)となること多し」

『古事記』の本文は1行12文字、注釈(伝)は22文字で、漢字片仮名の乱れない几帳面な字体です。

宣長はそれまでの訓みを劇的に変えました。文献実証主義(同時代あるいはそれよりも古い用例を根拠にすることによって、はじめてその言葉の正確で客観的な理解が可能になるという考え方)により、万葉集や日本書紀の用例から読みました。例えば本文冒頭「天地初発之時」をそれまでは「あめつちのはじめてひらくるとき」と読まれていましたが、宣長は「あめつちのはじめのとき」と読みました。また、解釈

### 本居宣長

江戸時代の国学者の本居宣長(1730-1801)は、伊勢国松坂の人ですが、地理的な関係もあって名古屋に多くの門人がいました。宣長の晩年までの門人488人のうち名古屋人が73人でした。初期の門人には万葉集研究の田中道麿(1724-1784)や天明4年(1784)入門の尾張藩御用人などを歴任した横井千秋<sup>よこいちあき</sup>(1738-1801)などがいました。また、宣長が寛政元年(1789)に横井千秋の誘いにより名古屋へ来た時には、稲葉通邦

(1744-1801)、植松有信(1758-1813)らが入門し、寛政4年(1792)には石原正明(1760-1821)や鈴木<sup>すずきあきら</sup>腹(1764-1837)らが入門しました。

横井千秋は『古事記伝』が原稿のまま埋もれようとするのを嘆き、刊行を企図し、永楽屋に刊行を働きかけ(経費も11巻刊行まで出資)、その出版に尽力しました。植松有信は『古事記伝』の版木を彫ったのが縁で入門し、宣長の信頼を得て版木職人として宣長著作の多くに関わりました。また、『古事記』校合のため、宣長に真福寺本『古事記』の写本を提供したのは、稲葉通邦ではないかと言われています。

宣長著作の出版で永楽屋は、莫大な利益を得ると共に一躍全国的にその名を知られるようになりました。明治に至るまで、神棚で宣長を祀っていたとか……。鈴屋遺跡保存会が出来て、佐佐木信綱の計らいで『古事記伝』版木を同会に寄託したそうです。

についてもそれまで行われてきた儒教や仏教の典籍に基づき解釈する方法を斥けました。儒教や仏教が渡来する以前の姿をうつした古事記には、儒教や仏教の影響があるはずがないという信念を持っていました。

## 『日本書紀』の注釈書

『書紀集解』 河村秀根 河村益根著 天明5自序 《河村文庫》

『日本書紀』の江戸時代における代表的注釈書が、尾張の国学者河村秀根<sup>ひでね</sup>(1723-1792)とその子益根<sup>ますね</sup>(1756-1819)による『書紀集解』で、最初の本格的出典研究の書とされています。本文の校訂を行い書紀の漢文としての性格を尊重し、出典の詮索、特に字句の出典に力が注がれており、実証的な解釈へと導いた注釈書として不朽の価値を持っています。

当館所蔵の『書紀集解』の草稿本には、美濃判無罫紙に書かれた第一次草稿「無罫紙本」、罫紙に書かれ清書される前の第二次草稿「罫紙本」の2種類があり、「罫紙本」は版を起こすための原稿本と考えられます。草稿本には、おびたしい書き込みや付せんが付いており、書物完成への苦心と情熱が伝わってきます。また、『書紀集解』の版本(版木に彫って印刷した本)には、大部分の巻に朱筆が入っているのが見られ、版本の校正用本であったと思われます。秀根の自序は天明5(1785)年ですが、完成は文化3(1806)年頃で、刊行が完了したのは、文政13(1830)年から天保7(1836)年の間と推定されます。

### 河村文庫

当館特別集書の「河村文庫」とは、尾張藩士、河村秀穎<sup>ひでかい</sup>・秀根<sup>ひでね</sup>・益根<sup>ますね</sup>によって伝えられた蔵書です。昭和20年3月19日の空襲で惜しくも一部をのぞき焼失しましたが、残された約4,000冊の内容は国学・国史・神道を中心に多岐に富み、現在もなお、古典研究の貴重な研究資料となっています。

河村秀穎<sup>ひでかい</sup>(1718-1783)は代々の尾張藩士で、町奉行、書物奉行をつとめました。吉見幸和<sup>よしみゆきかず</sup>(1673-1761)名古屋東照宮神官)に師事し国学・神道に通じ安永2年(1773)、白壁町にあった自宅の2万余の蔵書を「文会書庫」と名づけ、同好の人びとに公開しました。

秀穎の弟の秀根<sup>ひでね</sup>(1723-1792)は、尾張七代藩主・徳川宗春の小姓として仕え、兄と同じく幸和に師事して、古典の研究を進めました。のち、熱田の神官に頼まれた講義を縁として、漢学者の次男・益根<sup>ますね</sup>(1756-1819)とともに、『六国史集解』<sup>りっこくしっかい</sup>の著述をしました。その学問は紀典学<sup>きてんがく</sup>と称され、尾張藩随一の学問の家柄でした。

## 名所図会に描かれた古事記

『尾張名所図会 卷之三』 岡田啓・野口道直編 <<名古屋市史編纂資料>>

日本武尊 宮簀媛命と一別の時 形見に寶劔を授たまふ 圖

草薙劍は、須佐之男命すさのおのみことが退治した八岐大蛇から出現した劍ですが、三種の神器として代々の天皇に伝わり、後に景行天皇の御子の小碓命おうすのみこと（倭建命やまとたけるのみこと）が東征を命じられ、伊勢の大御新宮に参り、姨の倭比賣おば やまとひめから「慎みて、な怠りそ」の言葉と共に授けられました。倭建命やまとたけるのみことは尾張国に至り、美夜受比賣みやすひめと還りに結婚しようとして東方へ向かいます。東征から帰還された際に約束通り結婚しましたが、美夜受比賣のもとに草薙劍を置いたまま伊吹山の神を倒しに行き、体を病み、三重の能煩野のほのに至ったときに亡くなりました。倭建命の魂は白鳥となって天高く翔けて行きました。のちに美夜受比賣は、熱田の地に神劍を奉斎し、これが熱田神宮の創祀となりました。

## ビジュアルで見る古事記

『古事記』が日本人に広く読まれるようになったのは、江戸時代に入ってからのことでした。寛永版『古事記』（寛永21年1644）、本居宣長の『古事記伝』（文政5年1822）などが出版され、古代の神話や説話が文字で普及していくと同時に、それを庶民にわかりやすく図像化もされていくようになりました。

幕末から明治の時代に古事記の神話世界を題材とした浮世絵版画が多く描かれました。その中で歴史画のお手本として重宝されたのが、菊池容齋きくちようさいの『前賢故實』ぜんけんこじつ（明治元年1868）でした。神武天皇の時代から後龜山朝にいたる臣下など571名の図像と略伝を載せ、上代では日本武尊やまとたけるのみこと、弟橘媛おとたちばなひめなどが描かれています。図像を描くにあたり神社仏閣や旧家の絵画資料を徹底的に洗い出して製作されました。『古事記』『日本書紀』始め列挙される引用書目は264にもなり、これほど大量の歴史上の人物の図像化は例のないものです。最後の浮世絵師とよばれた月岡芳年つきおかよしとしの『日本略史之内 素戔嗚尊すさのおのみこと…』など明治中期の多くの画家が、歴史画を描く際の基礎的資料として影響を受けました。

明治中期、国学者の黒川真頼くろかわまよりの「本邦風俗説」（明治43年刊『黒川真頼全集4』日本風俗説として所収）は、主に出土した埴輪や文献の描写を基に、太古から中古の時代の髪型、服装、装飾品などがどうだったのかを詳しく考察したもので、豊富な図入りで美術専門誌『國華』に掲載されました。発表された明治中期以降、画家たちが神々を描く時のよりどころとなり、神々の姿がパターン化されました。美豆良みづらと呼ばれる髪みづらの結い方など今日見慣れた神の絵姿はここから来ており、多大な影響を残しました。

明治時代には、古事記の神話を含んだ外国語訳絵本も刊行されました。日本昔話の外国語訳本のシリーズ『JAPANESE FAIRY TALE SERIES』の中に「八頭の大蛇 THE SERPENT WITH EIGHT HEADS」「因幡の白兔 THE HARE OF

INABA」 「海幸彦山幸彦 THE PRINCES FIRE-FRASH AND FIRE-FADE」が入っています。日本画家による挿絵と外国人の英訳で、和紙に木版で摺り上げた和洋折衷の彩色絵本です。その対訳本『対訳日本昔噺集 第2巻』（2009 彩流社）が発行されており、当時の原本の雰囲気伝わります。

明治末から大正にかけて青木繁が描いた『古事記』を題材にした一連の油彩画《わだつみのいろこの宮、大穴牟知命、日本武尊など》は純粋なイメージで描かれた作品として高く評価されています。昭和になって堂本印象の美しい《木華開耶媛》、安田靉彦の気品のある作品《酒折宮、居醒泉、草薙の剣》などが描かれました。

平成では、安彦良和による大國主をモデルにした長編歴史漫画『ナムジ』神武東征をモチーフにした『神武』、こうの史代のボールペンだけを使って漫画化した『ぼおるぺん古事記』1天の巻・2地の巻などが出版されています

#### みづら 美豆良

##### 太古の結髪法

太古に、男子の髪は左右に中分けしてこれを梳り、左右の耳の邊にてこれを結束す、これを美豆良といふ、美豆良は元美々豆良なるを約言して美豆良といふ、耳の邊にて結束するが故なり、古事記上卷伊邪那岐命の伊邪那美命を追ひて夜見國に到りませる條に、故刺左之御美豆良湯津々間櫛〇以上文とあるをもって、男子は髪を左右に分けて結束せしこと瞭然たり、・・・



美豆良イラスト：ST

説明文：『黒川真頼全集 4』日本風俗説より

◆ 『ビジュアルで見る古事記』の展示では、所蔵している上記の本以外に、古事記に関する展示図録類、出雲や奈良の古事記ゆかりの地への旅のパンフレット・リーフレットなども展示しています。

平安時代の出雲大社は48mの高さがありました！

日本の歴史学者の多数が、出雲神話は完全にフィクションだと思っていたそうですが、1984年～1985年「荒神谷遺跡」(銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本を発掘)、1996年「加茂岩倉遺跡」(銅鐸39個を発掘)が発見され出雲に一大文化圏があったことが証明されました。また、2000年には出雲大社境内から、出雲大社宮司千家に伝わる「金輪御造宮差図」(出雲大社本殿の平面図)の通り、巨木3本を1組とした直径3mの柱(宇豆柱)が発掘されました。これらの遺跡発掘により出雲に王国があった可能性が強くなりました。天禄元年(970)平安時代の文人、源為憲が編集した『口遊』(基本的知識を口ずさんで覚える貴族の子弟のための教科書)に当時の巨大建築の順として「雲太、和ニ、京三」(雲太は出雲大社、和ニは東大寺大仏殿、京三は大極殿のこと)と書かれています。東大寺大仏殿は創建時およそ46mの高さがあったそうなので、平安時代の出雲大社が巨大であったことは間違いないようです。

引用・参考資料：

『尾張名古屋の古代学』名古屋市博物館 1995

『古事記の歩んできた道』奈良国立博物館 2012

『大須観音 いま開かれる、奇跡の文庫』大須観音宝生院 2012

『かのんちゃんとまめおにくんと行く大須観音の宝物ガイド』大須観音宝生院 2012

『古事記 編纂1300年記念』(別冊太陽)平凡社 2012

『芸術新潮』63巻6号 新潮社 2012

『大出雲展』島根県立古代出雲歴史博物館 2012

『ゼロから知る「古事記」』学研パブリッシング 2012

『古事記』(岩波文庫)倉野憲司校注 岩波書店 2007

『熱田神宮の伝説と名所』熱田神宮宮庁 2012

『なら記紀・万葉名所図会-古事記編-』奈良県 2012

『古事記ゆかり地マップ』奈良県 2012

引用・参考ホームページ：

『名古屋市図書館』<https://www.library.city.nagoya.jp/collection/tokubetu.html>

『本居宣長記念館』<http://www.norinagakinenkan.com/>

名古屋市鶴舞中央図書館  
奉仕課奉仕第二係  
2013年1月 発行